

# 読書

著者に  
聞きたい

## 『RURIKO』(角川書店・1575円)

林真理子さん



## 浅丘ルリ子の半生描く

満州の首都・新京。昭和19年の静謐な描写から浅丘ルリ子の半生を描く物語は始まる。

「ルリ子さんのルーツが満州にあることに興味を持ち、どうしても満州から描きたかった。徒花のような満映の物語とルリ子さんの物語を合体、どうないか」と考えたという。浅丘さんとともにハルビンを旅した。「非常に温かくして、臺表がない。だれの悪口も言わぬいいのに、オーラを持つてやつたままでした」。執筆前には本当に幸せだった」とおつしやつてました。執筆前には當時の新京(現・長春)に赴

き、現存している満映の建物も訪ねた。静かな導入から一転、半ばから石原裕次郎、美空ひばり、小林旭ら華やかなスターたちの恋と心理劇が展開する。いきいきとした会話は、この人物なつかしさもありなんとうなづかれるが、それは

『溶けゆく日本人』は本紙に掲載されていたときから注目していたが、新書として手にし読み落としが多いことに気が付いた。一冊にまとめられてシリーズが完結すると、実感した次第である。

「連載の素地は六年ほど前にできていた」とあとがきで述べているが、日本人のメルトダウンはかなり前から始まっていた。ローマル破壊の惨状も一朝一夕でははない。平成11年、この傾向について警告を発した弊著『金美齡の直言』は時期尚早なのか、話題にならなかつた。がけつぶらに立たされなければ覚醒しないのか。転落してからでは救いはない。

本書で提起されている問題はすべて「国民を映す鏡」であるが、「過保護が生む堕落」「人間関係の不全」など、評者もずっと発信し続けている。実は、テ

エピソードの一つ一つがおのの示唆に富んでいるが、「向き合はず親子」親だけの「会話」は、しつけ、人格形成の原点である。

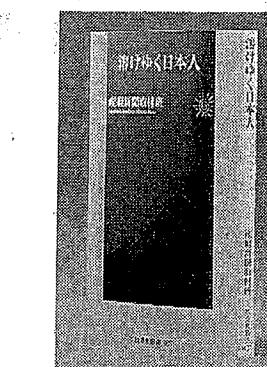
母親は子供が出会う人の距離がこんなに遠くなる。母親は子供が情結豊かに育つべきだ。家庭教育の喪失に思い至る。母親は子供が出会う人の最初の教師なのだ。親子

が、向き合はず親子、親だけの「会話」は、しつけ、人格形成の原点である。

数十年来、「大丈夫か日本語」と評者も言語力の衰退を折々指摘してきた。英語教師なのに学生の日本語ばかり注意していた。本書はすべての日本人が反面教師として熟読すべきだ。

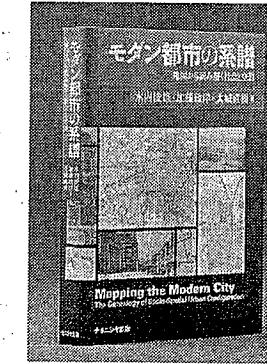
## 『モダン都市の系譜』 水内俊雄、加藤政洋、大城直樹著

(ナカニシヤ出版・2940円)



評・金美齡

(評論家)



評・初田亭

(工学院大教授)

評・千葉胡



戦前から現代までを視野に入れ、大阪を中心に関西圏の都市がもつ魅力について語る本であるが、単なる「都市論」を以て「大阪論」にもなっている。

都市を語る方法は、都市計画やエッセーなどいくつもあるが、ここでは、地図を読み解いていくことで都市を語ることが試みられており。しかし、地図を読み解くとしても、地図の記号や表記について説明する本ではない。「地理的象徴」というても、地図の記号を超えたところ空間―社会の構制を喰き取る感性を「地図からみていく」と

で、著者たちは「インナーリング」と呼ぶ、城下町など古い都市を取り囲むように明治以降に市街地化が進んでいった最初の地域を対象にして、社会を構成する當為の諸刃を読み込んでいくことが試みられている。

本の構成は、「近代都市空間の成立」「モダン都市」「戦災と復興」「高度

## 『コンゴ・ジャーニー』上・下

レドモンド・オハンロン著 土屋政雄訳(新潮社・各2415円)

「こんなものは嘘だといわれたら、小説家の負け。私たちは物語作家は技をみせないと」。当時を知らない世代の人にとって共通の記号だった。でもいま、その記号が通じない。おそらく当時、銀幕に感じたような、胸躍るような気分。読了後、それを追体験できることは間違いない。



ROCKS  
A PUBLISHER & BOOK  
ERS (SPBS)  
京・渋谷)が10  
「ROCKS」  
OCKSとは「牛  
場所」に成り下が  
った」と、刺激的  
掲げられた。

はやし・まりこ 昭和29年、山梨県生まれ。「最終便に間に合へば」「京都まで」で直木賞、「白蓮れんれん」で柴田錬三郎賞。

字」。芥川賞作家「治療、家の名」ス」とグラビア、川俊太郎とイラス

## 地図から読み解く京阪神

ユ一

成長と現代の都市空間」か  
らなっている。多くの近代  
都市の骨格となつた「城下  
町」から始まり、大阪、京  
都、神戸といった、関西を  
代表する3つの都市の戦後  
までを取り扱い、首都圏が  
なつているのに対して、関  
西圏ではそれの特性を  
もつた地域が集まる、モザ  
イク的な都市分布を形成し  
ている点などを指摘して  
いる。また各章にはいくつか  
の「特論」を設け、小説な  
どに描かれた都市を紹介す  
ることで、都市の変遷をわ  
ざしく理解できるようにし  
ている。

本の構成ベースは、大学  
における「初回生向けの共  
通教育」の講義内容にもこ  
づいている。それだけの「会話」  
だけの「会話」は、し  
つけ、人格形成の原点であ  
る。母親は子供が出会う人  
の距離がこんなに遠くて  
は、子供が情結豊かに育つ  
訳がない。

数十年来、「大丈夫か日本語」と評者も言語力の衰退を折々指摘してきた。英語教師なのに学生の日本語ばかり注意していた。本書はすべての日本人が反面教師として熟読すべきだ。

「こんなものは嘘だといわれたら、小説家の負け。私たちは物語作家は技をみせないと」。当時を知らない世代の人にとって共通の記号だった。でもいま、その記号が通じない。おそらく当時、銀幕に感じたような、胸躍るような気分。読了後、それを追体験できることは間違いない。